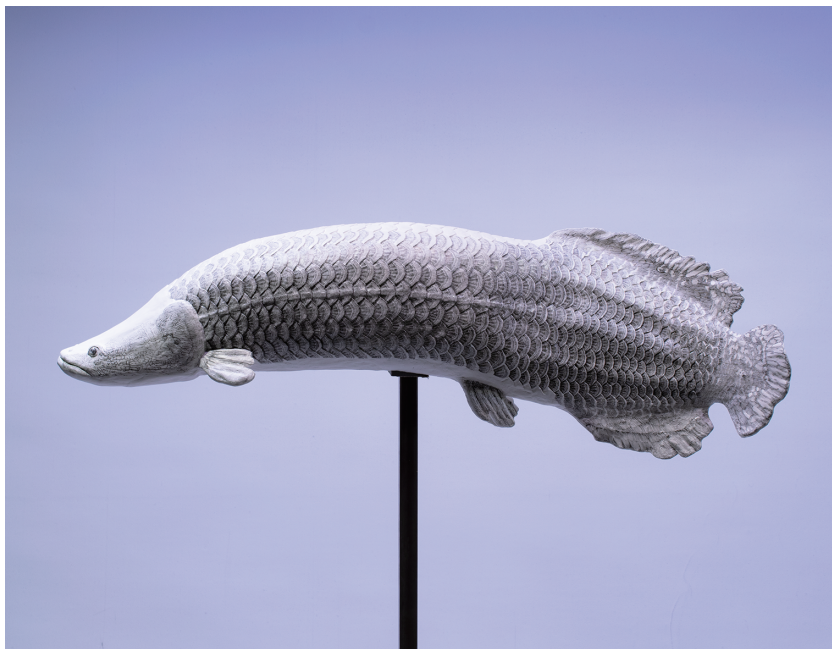


面と線

鎌上大輔

デザインコース

立体物にデッサンを描くとどうなるのか。それがこの作品の始まりです。極端に言えば、面の集合体である立体の彫刻、線の集合体である平面の絵。この二つに違いはあるのか。立体である意味とは。線である意味とは。一つの作品に置いてこの二つが、それぞれを補い合い、違和感を持たせ、併存する。



彫刻／石膏、サイザル、ペン、合成樹脂塗料、木材／h350×w300×d1000mm

煙、立つ

Open the eyes

中村杏

美術・工芸コース

煙が立つ。

そこには何も無かったはずなのに。いや本当はあった。見えなかつただけ。人は日々、様々な感情を生み出しては忘れていく。それらはどこかを漂っているのではと思うことがある。心が燃え上がって、煙を吐き出す。それが遠くに見える。「面をつけて舞うのではなく、面を舞わせるのだ」という能の言葉がある。憑依状態になることを目指しているのだろう。何かのきっかけで、感情が蘇ることがある。まるで漂う過去の感情が憑依しているようだ。それはひとつの幽霊の形なのではないか。ならば、と考える。感情が生まれた瞬間の形もあるはずだ。生まれたものがあるならば生まれる前のものがあり、外側があるならば中身もある。柔らかく幾何学的な造形から顔を出す、今まで中身であったもの。その生まれる瞬間を「面」の形にした。

煙が立ち、その一呼吸に、人は人生を変えられる瞬間がある。遠くに煙が立っているのが見える。



彫刻、インスタレーション／はりこ、和紙、岩絵具、アクリルガッシュ、レース糸、映像／サイズ可変

信仰

森千紘

美術・工芸コース



彫刻／石膏、アクリルガッシュ／h550×w1030×d300mm

Mold

西岡佑

造形芸術コース

彫刻の制作過程で、石膏は別の素材で作品を完成させる途上の中間素材として扱われることがある。石膏に水を加えて混ぜ合わせると液状になり、数十分で硬化する。石膏のこうした性質を利用し、型(mold)に沿わせて石膏に形をもたせるが、型がなければ石膏は形が定まらない。人は、生まれた時代などの外的環境、性別、信条などの様々な要因に応じて自己を形成する。何かになろうとする瞬間、人は不安定さとともに、あらゆる可能性をもつ。石膏も人も、なにかになろうとするその瞬間を作品にした。



立体造形／石膏、鉄／h2004×w650×d400mm

目覚める

吉野瑞穂
造形芸術コース



立体造形／張子、紙／h950×w1250×d1680mm

小さな森を愛する

長谷川桃子
造形芸術コース



彫刻／樹脂、和紙、アクリル絵具、岩絵具、水干絵具／h594×w614×d591mm